

湖に面したエバンストンの町。夫、私、娘の家族三人がここで迎えるお正月も二度目となりました。

初めての海外生活が始まったのは一昨年八月、娘、茜が一歳二か月の時です。

○ここはアメリカ

こちらに着いてから数日後、茜をストローラー（ベビーバギー）に乗せ、ダウンタウンまで散歩に出掛ける。

途中、人と擦れ違う際、目が合うと必ず「ハイイ」と挨拶され、茜を見て「かわいいお嬢ちゃん」「いくつ？」

と声をかけてくる。実に明るい。その中で年配の御婦人に「靴を履いてないのね。すごいわ!」と言われ、少々戸惑う。茜は、まだひとりではよく歩けなかったし、特に寒い日でもなかったので、靴下も靴も履かせていなかったのである。感覚の発達や健康上の理由から冬でもなるべく素足にさせておいた私には、夏の暑い日にそうしておくのは当然のことだった。しばらく行くと、今度はやはり茜と同じようにストローラーに乗った二歳位の子

供の「ノー・シューズ、ノー・ソックス」の声が聞こえてきた。これには、さすがの私も驚いた。よく注意してみると、明らかにまだつかまり立ちもできないような乳児も靴下と靴を身につけている。ベビー用品店には新生児からの靴もかなりの広さを占めて並べられている。どうも部屋の中でも靴を履いて過ごすこの国では靴は服と同じ感覚で履かれており、新生児といえども服を着る時は靴を履いているものらしい。

赤ちゃんが小さな靴を履いているのは確かにかわいらしいものだが、だからといって歩けもしないのに窮屈な靴を履かせられる子供はいい迷惑かもしれない。しかし、ここはアメリカ、ここにはこのやり方があるのだ。

参考の為にこの点について何人かのアメリカ人に聞いてみると、全員、外では乳児にも靴を履かせているが、家の中では色々であった。学生の中には平気で街の中を裸足で歩いている人も多く見かけるし、要するに靴が服装の一部であるとはいえ、時・場所・場合をわきまえて

おけば、履こうが履くまいが、履かせようが履かせまいが自由なのである。

○感謝祭の日に

感謝祭（サンクスギビングデー、十一月第四木曜日）

はクリスマスと並ぶ大きな祝日である。この日、多くの家では離れて住んでいる家族が揃い、また人を招いて、ディナーを共にし、秋の収穫を感謝し祝うのが常である。我家もある家に招かれ、多くの友人達とディナーを楽しむこととなった。

この家は夫婦と子供が三人の家族で、一番下の子供は六か月のジョナサンである。大人は色とりどりの御馳走の並んだ大きなダイニングテーブルで子供は子供用の低いイスとテーブルで、それぞれ感謝のお祈りをしてディナーが始まった。と、そこへ子供の泣き声。寝ていたジョナサンが目を覚ましたらしい。母のダイアンはジョナサンを連れに二階へ。しかし、先の泣き声は階上から聞こえて来たのではなかったようだ。尋ねると、スピーカ

ーからだという。家が広く、子供が泣いても直接、聞かないので、子供部屋にトランシーバーを置いてあるという。特に上流というわけでもない、ごく普通の家庭である。日本では考えられない家の広さだ。

さて、ジョナサンを連れて来たダイアンはテーブルに戻り、会話に再び加わり始めた。話しながら何やら白い布をジョナサンの頭からスッポリかぶせた。私は、ジョナサンが眠るには明かる過ぎるので、そうして視界を遮っているのだろう、それにしてもおもしろい事をすると思いつながら見るとはなしに眺めていた。ダイアンは相変わらず教育か何かについて話している。暫くして布がはずされると、そこにはジョナサンの満足そうな顔があるではないか。何とダイアンは口では全く普通に話をしながら白い布の下でジョナサンに授乳していたのだ。この場合、もし私だったら席はずし別室で子供の目をしっかりと見つめながら授乳したであろう。授乳時には他人と話をしてもいけない、他の事に気をとられてもいけない、それはどんな事にも優先する母と子だけの大切

な時であると考えていた私は相当なショックを受けた。その行為がただペットに餌をやっているように見えて、反感を持ったものだが、今思うと、その日のホステスであるダイアンはディナーの席から離れることが出来なかったのである。

このダイアンは、子供達の母であると同時に彼らの学校の先生でもある。ジョナサンには八歳の兄、六歳の姉がいるが、彼らは学校には行かず自宅のキッチン隣にある部屋で母に全ての教科を教わっている。彼女は今の学校教育に疑問を持っているのでそうしているらしい。自分勝手に教えているのではなく、そうした人達の組織があり、カリキュラムがきちんとできているという。良し悪しは別にして、このような教育法が認められ、それをしっかりと実行している家族がいることを知って、またもカルチャーショックを感じたのだった。

○アメリカの母親は元気？

夫は疲労回復の為、しばしばサウナを利用している。

ある夜、サウナから帰宅して言うには、サウナの入口にかごに入れられた乳児がぼつんと置かれ、驚いて中にはいると、その母がサウナで汗を流していたという。聞くと産後四週間で少し太り過ぎたのでシェイプ・アップよ、と笑って答えたらしい。私は自分の産後四週間の頃——それまでの家事に加え、初めての育児でてんてこ舞い、寝不足で常に疲れていた——を思い出し、その余裕に感心してしまった。

また、ある日、茜を連れて公園に散歩に出た際、子供に日光浴をさせながら優しく微笑みかけている幸福そうな母子に出会う。生まれて一か月位だろうか。「何か月？」と声をかけると「四日。」との答。「四日？」と聞き返すともう本当に嬉しくてたまらないといった表情で「ええ、四日。」生後四日といえれば日本では母子共、まだ病院のベッドではないか。アメリカでは出産の為の入院日数は通常三日、帝王切開でも四日と聞いている。という事は彼らは前日にでも退院してきたのであろう。日本では普通でも入院は一週間、その間、服を着て外に出

るなど考えもつかなかった。それに生後四日の新生児を外に出して良いのだろうか？ 生後一か月頃に外気浴から始めて、日光浴も第一日は手首、足首から先、第二日目は……と保健所からの指導が確かあったが。

旅行・買物・子供連れで行ける気軽なパーティーなどに出掛けると、生後二週間・四週間・六週間といった新生児、乳児を連れた夫婦が目につく。抵抗力、体力のまだ弱い子供をそのような場所に連れ出して良いかどうかはともかく、まだ首も座っていない子供達を連れた母親が、疲れた表情ひとつ見せず、元氣潑刺と活動しているのには感心させられる。

この違いは一体、何なのだろうか。第一にアメリカ人と日本人では体力が根本的に違うということである。この体力の差は男性社会でも明らかかなようで、夫と友人達の間の話題にもしばしば上る。もともとこの体の作りが違ふとなれば、これはもうどう足掻いても仕方のない事で諦めるしかない。しかし友人の中にアメリカで出産した日本人も数人いるが、彼らもまた元氣な事を考慮

すると、どうも体力の差だけではないらしい。

十日前に出産を終えた日本人の友人宅に御見舞いに行くと、彼女はもう洋服を着て、私にコーヒーを入れてくれ、彼女の夫はその間、名前が付けられたばかりの我子を抱き、おむつ替えなどの世話をしていた。彼らは退院直後は食事の用意だけは人に頼んでいたが、以後は全く他人の手伝いなしでしている。

アメリカに来て、まず感じたのが家事が合理的で非常に楽だという事であった。週に一度買物をし、食料品は大型冷蔵庫に収納、食器洗い機、デイスポーター（流し台に取り付け生ごみを処理して下水に流す機械）の利用、洗濯も週一、二回コインランドリーでまとめて乾燥までし、始めてから畳み終わるまで、せいぜい二時間。等々。その合理性がベビー用品にまで徹底している。おむつは殆ど百パーセント紙おむつ、ミルクも粉ミルク・液体ミルクがあり、液体ミルクは調乳の必要がなく瓶の口にそのまま使い捨ての乳首を付けて飲ませる。従ってこれは消毒の必要がない。また哺乳瓶も粹だけの物があ

り、ミルクや水、果汁などはプラスチックの袋に入れ、それを枠にはさみ使用し、この袋も使い捨て。瓶詰のベビーフードも種類が豊富、と教え上げたらきりが無い。そして出産前の両親学級では出産後の負担を少しでも軽くする為に、使い捨てのプラスチック、或いは紙のコップ・皿を大量に準備しておく事を指導しているという。

自分の場合を思い出してみると、朝起きて、まず、洗濯機を二度まわし、その合間に脱脂綿・哺乳瓶の消毒、三度の食事の準備に後片付け、子供が寝ている間に急いで買物、天気が悪くおむつが乾かなければアイロンかけ、そして勿論、授乳・おむつ替えなどの子供の世話もしていた訳だが、とにかく育児の本質的でない部分に精力の大部分を注いでいた。もし、そこでおむつの洗濯、食後の片付けだけでもなくなれば、かなり時間・労力とも短縮され、もっと元気で余裕のある母になれたのではないかと思う。にもかかわらず、子供が生まれて大変なのは当然、疲れて当然と思ひ、むしろその余裕のない忙しさに一種の充実感を覚えていたのは、今となっては少

々疑問である。

何に一番の優先順位があるかを考え、あまり重要な点は少々我慢し、ぼつざりと切り落としていくアメリカの合理性に学ぶ点が多い。(資源や処理等の問題もあるが……)

また、ここで忘れてならないのは夫の育児参加・家事参加が当然のように行われている事である。出産前の両親学級に夫婦揃って出るのは常識。お産も夫婦協力し、誕生後も母親にしかできない——母乳を与える——家事以外は自ら進んでおむつを替えたり、ミルクを与えたり、パーティーでは抱っこベルトで子供と一体になっていたり、とその姿がごく自然なのである。夕方になれば、ある時刻を境にして公園で遊んでいた母親が父親と入れ替わるし、(この交替は実に見事)、育児などの講演会・研究会などは大抵、夜に開かれ、両親揃って参加している様子。育児・躾は母親の役目と大方見なされているどこかの国とは違い、自分達二人の子供は二人で育てるという意識がはっきりしている。

楽しく、また一大事である育児を両親が同じレベルでとらえれば、母親はさらに活力に溢れ、父親は人間性が回復され、子供はその両親からそれぞれ異なる刺激を受け、豊かに柔軟になり、三者にとってプラスになることは疑いない。とはいふものの、仕事にとられる時間が多く、家族が一緒に過ごす時間が極端に少ない今の日本のサラリーマンの家庭で、夫婦が同じ割合で育児参加する事は、夢のまた夢であるが、育児はふたりの仕事という意識だけでも皆が諦めずに持ち続けていけば、少しずつでもよい方向に変わっていくのではないかと思う。

○子供は子供、親は親

アメリカではあまり他人に干渉しないのだが、ある時「あなたは子供を抱き過ぎる。泣いてもほおって置かなくてはいけない。」と注意された事があった。私は、茜が甘えてきたら迷わず抱き上げていたし、特に他人と話している時はすぐに膝に乗せてやったりしていた。そうすれば茜は満足して静かになり、話も中断しなすむ

からである。アメリカ人の親子であれば、ひと言「ノー」と言っておしまいである。甘えてきた子供はその親の毅然とした態度を見て、再びひとり静かに遊び出す。

またレストランでいつも感心するのは、どんなに幼い子供でもハイチェアに大人しく座っていることである。決して大声を出したり走り回ったりはしない。親達は時々、子供に声をかけるだけで、自分達の食事を楽しんでいる。

大人同志が話をしている時はそこに立ち入らないよう躡けられている、というより、大人の世界に立ち入るべきではないという事が自然に身についているようである。

食事に関して思い当たるのは、子供の食べ残しを親が食べて片付けることは決してないという事だ。ここにも親と子の境界がはっきりしている。

幼児がいたとしても毎日曜日には教会に行き、パーティーの数が減る訳でもない。当然、ベビーシッターに子

供を預けることになる。常に子供のいる所に母親がいる、母親がいれば子供がいるという姿はなく、夫婦だけ或いは母親だけの時間・楽しみを持っている。

「欧米では子供は生まれた時から両親とは独立した寝室で寝ているが、日本では子供が幼い頃は母親を真中に家族が川の字に寝ている家庭が多く、それが理想的」という記事を読んだ事があるが、その理由のひとつとして日本の母親は愛情表現が苦手という点が挙げられていた。そう言われてみると確かにそうで、子供と一緒に遊んでいる時のアメリカ人の母親の動作の大袈裟な事、表情豊かで賑やかな事にはとてまかなわれない。子供に愛情を示す時には徹底的に、そして自分の時間には子供の事は全く気にしない、こちらの母親にすがすがしさを感じる。そうする事によって自分自身も子供も客観視でき、親子関係もめりはりのあるものになるのだろう。

アメリカへ来て一年半近くたつ。その間、茜はひとりで歩き、走り、飛び跳ねるようになり、自分の頭で考

え、話し、歌を歌うまでに成長した。茜の成長と共に私達家族三人の影響の及ぼし合い方に変化が見られるのは当然だが、こちらへ来て夫が家族と共に過ごす時間が大幅に増え、また世界各国の様々な考え方に触れられる事が家族の関係にもたらした変化は大きいように思える。日本では明らかに夫——私・茜となっていた関係が夫——私、夫——茜、私——茜そして夫——私——茜という、少々複雑な、いい関係になりつつある。

